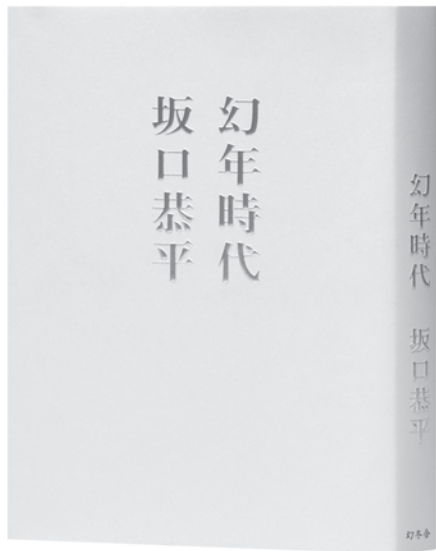


## 水道橋博士

生まれ直しの  
時間旅行  
幼年時代の先に見た  
光とは

今月の書評

『幻年時代』  
坂口恭平

小社刊 / 1365円

坂口恭平の『幻年時代』を文字で語るために、今、まさに「現年時代」のボクと坂口恭平について語っておきたい。

2013年7月11日——。娘の文の7回目の誕生日に、この文を記している。

一昨々日、各地で梅雨明けし、いきなり夏が来た。蟬の代わりに日本中で参院選の選挙カーのウグイス嬢が喚いている。

ボクは、この猛暑と選挙の狂騒の中で政治に何も期待していない。何故なら新しい政府を既に幻視しているからなのだ。

坂口恭平を知ったのは2012年5月に出版された『独立国家のつくりかた』（講談社現代新書）だった。この本には、78年生まれの建築家志望の青年が「子供の時から質問——に答えてくれない大人」に疑問を抱いたまま路上生活者の観察を始め、「0円ハウス」を発想し、不動産は不要だという考えのもとに移動出来る「モバイルハウス」を製作し「建てない建築家」として注目を集めていく過程が書かれている。

そして彼は3・11以降を無政府状態と捉え、2011年5月10日、地元の熊本に新政府を設立し初代内閣総理大臣に就任。

インタビュアーではこんな風な言い方もしている——。「狂った世界を正常に戻さな

きゃいけない。でも、今や普通選挙によって世界を変えるのはほとんど不可能です。だから、現状の世界を無視して行動するしかない。世界を変えるのではなく、世界を増やすんです」（週刊朝日）

この時期、ようやく彼の言動に焦点が合ったボクは、自分が司会をつとめる生放送に新政府総理大臣として招聘した。

2012年7月4日——。MXテレビのスタジオで初対面を果たす。躁と鬱が繰り返す、坂口恭平の人生の四季の中で、最も熱くエネルギーに燃えていた夏だった。

一方、ちょうど50年の半生の中で鬱期であったボクは、その夜の邂逅から反転し、彼の熱に急ぎ立てられ夢中で彼を追いかけた。

8月3日——。ボクが本業の漫才師の本場所としている紀伊國屋サザンシアターでの冒険家・石川直樹とのトークショー。此处で坂口恭平が客席に「竜巻」を巻き起こした。彼は、まるで楽器を奏でるかのように話し、インスピレーションを脳内に描き、その絵を瞬時に言葉で伝えて、そこに笑うしかない滑稽さも共存させた。同じ舞台上に立つ演者として、その才能を確信した。

以降、坂口恭平はボクの夜空に仰ぐ「お笑い男の星座」の一等星のひとつだ。ボク

の幻年時代でもある思春期、その闇から救い出した師匠ビートたけしを基点とする綺羅星のごとき星座群の中でもひとときわ若い超新星であり、今もその輝度は高いままだ。だから「星星峡」にボクが一文を寄せるのも、星座のように必然的な意味を持つ。

しかし、この邂逅以降、狂ったのは世界ではなく彼本人であった。建築家として、現代アーティストとして、さらには新政府総理として世界に認識された彼は、欧州外遊中に鬱々とした冬の時を迎えた。帰国後、活動の拠点も東京から熊本へ移った。

彼の呻き声はこの本の産声でもあった。その時のことを鳥のさえずり——ホオジロの聞きなし「筆啓上仕候」——のように彼は「Writer」に記録を残している。

『坂口恭平の幼年時代』というタイトルのみだった文が、2013年1月25日に「幼」という文字から一画を抜くと「幻」であるという気がついた瞬間、「幻年時代」と名付けられストーリーが零れ出した。過去への時間旅行を繰り返し、まるで鬱から躁へと反転し、生まれ直すような瞬間をボクは星の点滅のように見た。超新星爆発は、星の終わりでもあり、始まりでもある。それは幻のように現れていった。そして『幻年時

代』は作品として現れた。

この物語に何度も自分を投影した。ボク自身も、幼少の時から人も社会も多様であることはわかってきた。その難解さに自分をすり寄せるために「芸人」となり、さらに「大人」になるために多大な時間を要した。しかし、この本の中で坂口恭平は目の前に広がる光景は多様であるばかりか、多層でもあること、そこには記憶の時間軸すら添えられることを想起し、原始、子供だけが持っていたあの空間を取り戻す。それは「小説」の中だけではなく、「現年時代」である今も「子供」のように振る舞う彼の行動と文字で刷り込まれてきたはずだ。

自分の宇宙へ寄り添う人を選ぶためには「手」の中に「鍵」の概念があると気がついてきた少年は、「幼年時代」という誰もが体験する煌めくような時間、そこに共存する閉じられた闇の刻に潜入し、感受性の扉を次々と開け、「暗号」を解読していく。その軌跡として「建てない建築家」は『幻年時代』を建築し、文学を手にした。

坂口恭平は狂ってこそその花であり、幻を見るだけでなく幻を生きている。そして文に残した幻の先に光はあるはずだ。